

二〇一〇年度 国語

(五十分)

答えはすべて解答用紙に書き入れること。

高一会

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

イギリスにおいて市民革命が展開していく十七世紀中葉に登場した経済学者の一人に、ウィリアム・ペティがいる。一般的には重商主義の経済学者として知られている。このペティの主著『政治算術』（一六九〇年）のなかに、当時のアイerlandの農民のことが記述されている。

「アイアランドは人民不足であつて、土地も、また家畜も非常に安価であるし、いたるところに魚類や鳥類がおびただしい。大地からはみごとな根菜……がとれ、しかもアイアランド人は、各人が自分の手でつくられるような馬具や索具を用いて、その農耕をおこなうことができ、ほとんど誰れでもが建てられるような家に住み、どの家婦もみな羊毛や毛糸のつむぎ手・染め手なのであつて、現在の様式にしたがえば、かれらは金・銀貨幣を使用することなしに生活し、また生存してゆくことができ、一日当り二時間とは労働せずに上述の^(a)ヒツジュヒンを自給することができるのである」
(大内兵衛・松川七郎訳、一九五五年、岩波文庫。旧字体は新字体に改めた)

イギリスの「国富」の増加をめざしていたペティにとって、このアイerlandの農民は変革の対象であつた。金儲けの楽しさも知らず、長い時間働きもせずに「貧しい」暮らしに^(x)甘んじているこのような人々こそが、経済の発展を妨げ、イギリスの足を引っ張っている人たちのようにみえたのである。彼らにお金を儲ける楽しさを教えなければいけない、とペティは述べた。そうすればこのような人々も、富を増やそうとして自ら働くようになるだろう、と。

この転換が近代的世界の幕開けを準備した。もちろん近代的な世界はそれだけによって成立したわけではない。経済に對する人々の精神だけを見ても、マックス・ヴェーバーが述べた「プロテスタンティズムの倫理」が歴史に与えた影響も無視できないし、トクヴィルが語ったアメリカにおける⁽¹⁾開拓民の精神も大きな役割を果たしていくことになる。ペティのめざしていた精神の「変革」もそのひとつだった。

トクヴィルの『アメリカのデモクラシー』（松本礼二訳、全四冊、岩波文庫）にも書かれているように、伝統社会で暮らした人々は自分の労働への誇りや、その労働が人々から尊敬を受けることに喜びを感じて日々の^(b)イトナミを続けていた。労働に楽しみや喜びがあり、その労働を認めてくれる地域や仲間の世界とともに生きることには充実した生活を感じ、そんな暮らし方である。ペティがみたアイerlandの農民もそういう人々だったのだろう。楽しみは労働や暮らしそれ自体にあつたのである。

だが、近代人たちはペティのめざしたように、次第に金儲けの楽しさを覚えていく。といつてもそれは多くの場合は^(y)漸進的な変化だった。歴史の長い社会では、この変化に抵抗するさまざまな要素もまた存在していた。過去から^(c)培われてきた精神が、金儲けの楽しさに突き進むことを妨げたのである。ヨーロッパでは労働の誇りを守ろうとする精神から初期社会主義運動が生まれていったし、金儲けの社会への^(d)ケンオカンは、知識人のなかにロマン主義の諸潮流を形成させていくことになった。

ところが歴史のない国、正確には先住民の歴史の抹殺の上につくられた開拓民の国アメリカでは、「金儲けの楽しさ」は妨げるものをもたずに展開していくことになる。トクヴィルの述べれば、自分の富の増大と地位の向上をめざすことが人間の使命だというような精神が社会を覆っていたのである。そしてそのアメリカが世界の経済、政治、軍事の中心に座ったとき、伝統的なものと奥の方で結ばれているそれぞれの社会の抵抗する精神は、その力を弱体化させていった。注目しておかなければいけないことは、人間たちが「金儲けの楽しさ」を覚えた社会では、ひとつの逆転が起つたことである。自分の豊かな生活を実現するために金儲けをするはずだったものが、(A)人々を生み出してしまったのである。労働も金儲けの道具になった。労働や生活それ自体が楽しみであった時代が終わり、労働は手段に、生活は疲れをとるための消費の場所に変わっていった。

一番の問題は金儲けに縁遠い人たちもまた、この構造に巻き込まれたことである。こうして賃金を得るために働き、消費によって生活を成り立たせる多くの人々がつくりだされた。

二〇一〇年度 国語

(五十分)

答えはすべて解答用紙に書き入れること。

高一会

一昨年、つまり二〇〇七年から顕在化してきたアメリカのサブプライムローン問題も、ひとつの「逆転」を私たちに教えている。家を買うことは安定した豊かな生活をつくるためのものはずであった。ところがこのローンはそういうものではなかった。それまでの資本主義では重要な人ではなかった低所得者に金融のフロンティアが存在することをみつけたのが、サブプライムローンである。これは低所得者を金融商品化する方法であった。家の購入が先にあるのではなく、低所得者に高金利のローンを組ませ、その結果つくられた債券を転売して市場で売ることに目的があった。この債券をつくるために家を購入させ、だから二、三年で返済不能になるようなローンを考え出したのである。こうして低所得者の商品化による新しい市場が形成され、家の購入が（B）のためではなく、（C）にされた。

このことにも象徴的に現れているように、現代世界ではすべてのものが市場の手段、道具にされて使い捨てられている。それが金儲けの楽しみを覚えた社会の末路であった。とするとこの時代は、何を教訓として私たちに与えているのであろう。その一つは労働と生産との（e）乖離である。

人間の労働は、元々は、労働生産物をつくりだす行為であった。その労働生産物は物であっても、作物やサービス、さらにはさまざまな関係のようなものであっても構わない。何か（D）なものをつくり、その（D）性を提供していく行為が元々の労働であった。

伝統社会では、囚人労働のような例外を除いて、ほとんどの労働は生産とひとつのものになっていた。労働をすることが生産をすることだったのである。ところが近代的な労働が展開するようになると、労働と生産は分離し始める。労働の論理と生産の論理が乖離し始めたのである。労働は以前と同じように（D）性をつくりだそうとするが、生産は剰余価値の獲得をめざして実現される。労働過程の論理と商品の生産過程の論理が分離し、そのふたつが二重化した労働・生産様式がつけられた。商品の生産過程にとっては、労働は剰余価値をつくりだす手段であり、人々は自分の労働力を商品として販売し、その代価で、つまり賃金で生活するようになった。「金儲けの楽しさ」を覚えた社会では、金儲けの方法を手に入れた少数の人たちと、その方法を実現させる手段としての労働を提供するしかない多数の人々を生み出していった。

人間の労働が手段であるなら、必要なときだけ雇い、必要なくなれば解雇した方が（あ）である。こうして労働は使い捨ての対象になり、労働に誇りを持ち、自分の労働が尊重されることを喜びとして人々が生きていた、そうした伝統社会のもっていた精神は、過去のものにならざるを得なくなっていた。

だが実際の歴史はもう少し複雑に展開している。というのは、資本主義は根源的にある矛盾を抱えているからである。資本主義の原理は簡単で、投資によって得られる利益を最大化していくだけである。だから賃金は安い方がいいし、労働者の使い捨ても容易な方がいい。ところがこの原理で突っ走ってしまふとふたつの問題が顕在化してしまう。そのひとつは、労働者の貧困化がすすむと市場が縮小し自らの首を絞めてしまうことであり、もうひとつは労働者の労働意欲が低下すると、経営基盤が崩れてしまふという問題である。資本主義を（い）に展開させると、その（う）な展開がうまくいかなくなってしまうのである。

その結果資本主義は、資本主義の原理が純粹に展開するのを阻害する要因が存在した方が、むしろ（え）な発展には好都合になるという（お）な構造を内蔵させることとなった。たとえば労働組合の力が強く、賃金の増加や雇用の安定を吞まされることは、資本主義の原理としては否定すべきことであるが、そういう力が働くことによって逆に市場の拡大や労働意欲の向上が実現され、資本主義は安定的な経営基盤を獲得していくことになる。それと同じことが国家による労働者保護政策や市場規制によっても発生する。

二十世紀終盤から世界を席卷した市場主義はこのことを見誤った。資本主義は自由奔放に振る舞い、一時の夢の実現を謳歌し、そして今日の挫折に至った。人間の労働が労働生産物をつくるという土台の上に、資本主義的な生産も実現する。市場もまた人間たちの営みによって支えられている。その意味を見失ったとき、労働が利益を得るための道具として使い捨てられる社会がむき出しのかたちでつくられたばかりでなく、資本主義もまた危機を醸成してしまつたのである。

それは資本主義もまた人間に依存するということを、すなわち商品の生産は人間労働に依存し、市場は人間の生活に依存するということを忘れ、自らの原理をむき出しのかたちで展開させた資本主義の必然的な結果であった。

私たちはこれから、この時代の精算をすすめる必要がある。そのとき私たちに問われるのは、その精算をどこまでおこなうのかという課題である。いまより少しは人間を大事にする資本主義に戻すところまでなのか。それとも^②ペティがめざした精神の「変革」の問題点までを視野に収めるのか。人間の労働や生活を商品経済の手段として使い捨てていくシステムはこのままでよいのか。

おそらく私たちは、資本主義を根本から問い直さなければならない時代にたたされているのである。人間労働の危機と資本主義の危機が同時に進行する時代のなかで、この課題が私たちの前に提出されている。

(内山 節『挫折と危機の中で』より)

問一 —— 線部 (a)～(e) について、漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書きなさい。

問二 (X)「甘んじている」、(Y)「漸進的」の本文中の意味は何ですか。次のア～エの中から適するものを、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- (X)「甘んじている」
- ア 心の底から、満足して納得している
 - イ 楽な状態に、慣れきってしまっている
 - ウ 努力もせずに、あきらめてしまっている
 - エ 仕方ないと思って、受け入れている
- (Y)「漸進的」
- ア 段階を追って次第に進むこと
 - イ ひたすら突き進んでいくこと
 - ウ 急激な変化と同時に進むこと
 - エ ゆっくりで気がつかないこと

問三 —— 線①「開拓民の精神」とありますが、これと同じ内容を示している部分を三十五字以内で抜き出さなさい。

問四 (A) から (C) に入れるのに適切な言葉を答えなさい。ただし、(A) は、十字以上十五字以内で、(B)・(C) は、五字前後で答えなさい。

問五 (D) には、すべて同じ言葉が入ります。その言葉を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 重要 イ 無限 ウ 有用 エ 高価 オ 意外

問六 (あ) から (お) に入れるのに適切な言葉の組み合わせはどれでしょう。次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|---------|-----------|
| ア (あ) 持続的 | (い) 安定的 | (う) 自己矛盾的 | (え) 合理的 | (お) 原理的 |
| イ (あ) 合理的 | (い) 持続的 | (う) 安定的 | (え) 原理的 | (お) 自己矛盾的 |
| ウ (あ) 安定的 | (い) 自己矛盾的 | (う) 持続的 | (え) 原理的 | (お) 合理的 |
| エ (あ) 合理的 | (い) 原理的 | (う) 安定的 | (え) 持続的 | (お) 自己矛盾的 |

問七 —— 線②「ペティがめざした精神の『変革』」とありますが、これは、どういうことでしょうか。本文の語句を用いて、四十字以内で説明しなさい。

二〇一〇年度 国語

(五十分)

答えはすべて解答用紙に書き入れること。

高一会

問八 本文の内容に合うものを次のア～オの中から、一つ選び、記号で答えなさい。

ア 十七世紀のアイルランドの農民のような生活こそが、生きることによって疲れた現代人にとって望ましい生活であることを冒頭に紹介して主張を展開している。

イ サブプライムローン問題に見られる資本主義の行き詰まりを批判的にとらえ、社会主義の優位性を読む人にわかりやすく解き明かそうとしている。

ウ 人間を軽視してきた今日の資本主義の問題点を、原理から説明することで、今後の資本主義のあり方を見つめ直す視点を提示しようとしている。

エ 人間労働の危機と資本主義の危機が同時に進行する今日の危機的状況を読む人に警告し、人間を大事にする資本主義の再構築の必要性を訴えている。

オ 資本主義の必要性を説き、それを推進したペティやヴェーバーやトクヴィルを失敗の事例としてとらえ直すことで、資本主義の行き詰まりの打開策を講じている。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問題作成の都合上、原文と問題文を変えた部分があります。)

「ごらんすって下さい。こんなになりました。どんなに一目会いたがって居りましたことか。」

「あわただしく彼をその部屋に導いて来て、妻の母が言った。死人の枕べの人々はいち時に彼を見た。」

「会ってやって下さい。」

母はもう一度言って、彼の妻の死顔を蔽うた白い布を取りのけようとした。

この時、彼は自分にも思いがけない言葉を、ふと口に出した。

「ちよっと待って下さい。僕ひとりで会わせてくれませんか。この部屋に僕ひとりにしてくれませんか。」

この言葉は、妻の親きょうだいたちに、一種の感動を起させた。彼らは静かに部屋の

彼は白い布を取りのけた。

妻の死顔は苦しそうな表情で、こわばっていた。げっそり落ちた両頬の間に、色の変った歯が飛び出していた。瞼の

肉はひからびて目玉にへばりついていて、額にはあらわな神経が苦痛を氷りつかせていた。

この、ミニクい死顔を見下ろして、彼はしばらくじっと坐っていた。

それから、両手をぶるぶる顫わしながら妻の脣に持って行って、口をつぐませてやろうとした。無理に閉じた脣は、彼

が手を離すと、再び、ニブく開いた。彼はまた閉じさせた。また開いた。同じことを、イクドも繰り返すうちに、しか

し口あたりの硬い線だけは和らいで来たことに、彼は気がついた。

すると彼は、自分の手先に熱情が集まって来るような気持ちになった。死顔のけわしい神経を和らげてやろうとし

て、ごしごし額をこすった。掌が熱くなった。

いじくりまわされて、新しくなった死顔を見下ろして、彼はまたへ A へ坐っていた。

「汽車でお疲れでしょう。お昼御飯を召し上って、お休みになって下さい。」

そう言いながら妻の母と妹とが入って来た。

「ああー」

いきなり母はへ B へ涙をこぼした。

「人間の魂は恐ろしい。あなたが旅から帰るまで、この子は死に切れなかったんだよ。ほんとに F シギだ。あなたが

一目見てやると、死顔がこんなに安らかに変わるなんて。——これでいい。この子もこれでいいのだよ。」

彼の少し狂気じみた目を、妻の妹がこの世になく美しく澄んだ目で見返した。それからへ C へ泣き伏した。

(川端康成「死顔の出来事」より)

二〇一〇年度 国語

(五十分) 答えはすべて解答用紙に書き入れること。

高一会

問一 —— 線部 (a) ～ (e) のカタカナを漢字に直して書きなさい。

問二 (X)「あわただしく」、(Y)「こわばっていた」の本文中の意味は何ですか。次のア～エの中から適するものを、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

(X)「あわただしく」

ア ひどく驚いた様子で

イ 落ち着かない様子で

ウ 大騒ぎする様子で

エ 困りはてた様子で

(Y)「こわばっていた」

ア 乾ききっていた

イ やせ細っていた

ウ 硬直していた

エ 傷ついていた

問三 (A)から(C)に入れるのに適切な言葉を、次のア～オの中から、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア はらはらと

イ しくしく

ウ じっと

エ 冷たく

オ わっと

問四 —— 線①「一種の感動を起させた」とありますが、「妻の親きようだいたち」は、なぜ「一種の感動」を起したのでしょうか。二十字前後で、説明しなさい。

問五 —— 線②「すると彼は、自分の手先に熱情が集まって来るような気持ちになった」とありますが、この時の彼の気持ちの説明として適するものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 妻の氷りついた苦痛の表情を溶かしてやるためには、熱気を集める必要があるという必死な気持ち。

イ 何度も妻の唇を閉じさせるように力を入れたので、体温が上がったことを手先で感じている気持ち。

ウ 妻の表情が和らいできたことに気づき、もっともっと表情を和らげてやろうという集中した気持ち。

エ 自分の思いが妻に伝わったことが分かったため、胸がいっぱいになり、うれしくて仕方のない気持ち。

問六 —— 線③「新しくなった」とありますが、これは死顔がどのように変わったことを表していますか。その変化が分かるように、本文中の語句を用いて二十五字以内で説明しなさい。

問七 本文の内容に合うものを次のア～オの中から、一つ選び、記号で答えなさい。

ア 妻の死に対してあくまで冷静な彼と、死顔の変化に驚き、取り乱す母や妹の姿が対照的に述べられた作品である。

イ 両親の反対をやっと乗り越えて結婚したものの、彼の旅行中に病死した妻の無念さが悲劇的に描かれた作品である。

ウ 彼の狂気じみた行為や性格を気づいていた妻の妹の、姉を慕う気持ちや姉を失った無念さが読み取れる作品である。

エ 妻の死顔の変化を通して、彼と妻の生前からの深い心の交流が示され、それが読む人の感動を呼ぶ作品である。

オ 人間の思いの強さは、死後に現れるその表情によって判断できることが、私たちの教訓として学び取れる作品である。

二〇一〇年度 国語

(五十分)

答えはすべて「解答用紙」に書き入れること。

高一会

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、^①よろづのことに使ひけり。名をばさかき^(a)のみやつことなむ言ひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒^(b)の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、^②いとうつくしうてゐたり。翁言ふやう、「われ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子となり給ふべき人なめり。」とて、手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。妻^(c)の^(c) 姫^(c)にあづけて養はす。うつくしきこと限りなし。いと幼ければ籠^(d)に入れて養ふ。

竹取の翁、竹を取るに、^③この子を見つけて後に竹取るに、節を隔ててよ^(e)ごに^(e)金^(e)ある竹を見つくること重なりぬ。かくて、翁やうやう豊かになりゆく。

この児、養ふほどにすくすくと大きになりまさる。三月ばかりになるほどに、^④よき^(f)ほどなる人になりぬれば、髪上げなどさうして、髪上げさせ、裳^(g)着^(g)す。帳^(g)のうちよりも出ださず、いつき養ふ。この児^(e)の^(e)容貌^(e)けうらなること世になく、屋のうちは暗き所なく光満ちたり。翁、心地悪しく苦しき時も、この子を見れば、苦しきこともやみぬ。腹立たしきことも慰みけり。翁、竹を取ること久しくなりぬ。いきほひ猛の者になりけり。この子いと大きになりぬれば、名を三室戸齋部^(h)のあきたを呼びてつけさす。あきた、なよたけのかぐや姫とつけつ。

(『竹取物語』より)

問一 —— 線①「よろづのことに使ひけり」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

問二 —— 線部(a)～(e)の「の」について、種類の違うものを一つだけあげ、記号で答えなさい。

問三 —— 線②「いとうつくしうてゐたり」とありますが、その意味として適するものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア とても美しい人になっていた
- イ たいそう美しい様子で座っていた
- ウ とてもかわいらしい人になっていた
- エ たいそうかわいらしい様子で座っていた

問四 —— 線③「この子」と同じ内容を表している語句を二つ、本文中より八字以上十字以内で抜き出さなさい。

問五 —— 線④「よきほどなる人」とありますが、その意味として適するものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 背丈が人並みである人
- イ 性格が大変よい人
- ウ 美しい顔をした人
- エ 財産がたくさんある人

問六 本文の内容に合うものを次のア～オの中から、一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 竹取の翁は、「もと光る竹なむ一筋ありける」と書かれている、以前から光っていた竹から、かぐや姫を見つけた。
- イ 「髪上げなどさうして、髪上げさせ、裳着す。」には、当時の成人式で行われた男女の儀式が具体的に書かれている。
- ウ 「この児の容貌けうらなること世になく」とあるようように、かぐや姫は、その美しい顔を世間でも隠そうとはしなかった。
- エ 三室戸齋部のあきたが見つけた「なよたけのかぐや姫」という名前は、かぐや姫の美しさが賛美されたものである。
- オ 翁は「取ること久しくなりぬ。」とあるように、黄金がある竹を取ることが長い間続き、「いきほひ猛の者」になつていった。

